スポーツと歯科医学の可能性
Possibility of a sport and dentistry

1K06A159　　田邊元
指導教員　主査　山崎勝男先生　　副査　彼末一之先生

【序論】

歯科医学は口腔領域だけでなく、全身健康や運動機能に深く関連する可能性がある。この歯科医学とスポーツの領域をまたぐのがスポーツ歯学であり、それを介して、予防医学、ＱＯＬの重視にシフトしつつある現在社会の中で、歯科医学の新しい価値を再発見しようというのが本論文の狙いである。

【第１章　スポーツ歯学の現状】

スポーツ歯学はまだ新しいで分野であり、一刻も早いスポーツ歯学の制度の整備、認知の為の啓蒙活動が必要と考えられる。そこで本研究では、本家のスポーツ医学についてその現状や体制を考え、それをスポーツ歯学に適応し、健康管理、健康増進、外傷の診断・予防・治療、外傷予防の為のマウスガード作製､競技力向上、アンチドーピングといったスポーツ歯学の役割を考える。また、そこからスポーツ歯学の今後の課題や目標を考察していく。

スポーツ歯学は、口腔領域を通して全身健康や運動能力向上に寄与することが分かっている。従来の歯科医学の範疇に囚われず、歯科医学を全身健康やQOLの向上の方法論の１つとして、予防医学にシフトしつつある社会に適応し、その成果を還元することで歯科医学に新しい価値を生むと考えられる。

【第２章　歯科医学とスポーツパフォーマンスの関連性】

歯科医学とスポーツを強く結びつけているものの１つが、歯科医学と競技力向上の関連である。歯科保健と競技力の関連を疫学的な観点からアプローチした調査研究では、その関係性を裏付けるものとなっている。また、特に競技力向上と深い関係にあるのは咬合で、これは咬合の３要素(咬合接触面積、咬合高径、水平的位置)によるものである。これらのメカニズムを解析するうえで、顎関節と咀嚼筋、三叉神経の特殊性の理解は重要になってくる。また、これらと中脳や脊髄との関連も指摘されている。加えて、この３要素を変化させたり、安定させたりするのが、マウスガードやＭＯＲＡ，テンプレートといった咬合器である。咬合学は咬合器の開発とともに進歩してきたゆえに、スポーツ歯学と咬合器の関係は深いものになっている。以上のように、上記の特殊性と咬合器こそが、歯科医学と競技力向上を結ぶキーとなっていると考えられる。咬合学が個性固有であるゆえに客観的な実験研究が難しいという事情があるものの、客観的な実験研究が待たれる。また、噛みしめが柔軟性や過緊張を誘発させる可能性もあるという負の効果があることも忘れてはならない。

【結語】

国は現在､「健康日本２１」という健康づくり対策を行っている。これは、栄養、運動、休養を３本柱としてそのバランスのとれた実践を推進している。歯科医学は栄養に関しては咀嚼が重要な役割を担い、運動に関しては本論文で述べた役割を担っている。休養も含めこの三者の

バランスこそが重要であるが、このバランス感覚を身に付けた健康に対する新しい価値の付加できる歯科医師が今社会から望まれている。そして、本論文がスポーツ歯学の啓蒙に一役買うことができれば、幸いである。